

調査報告

鬼師の世界

——黒地：山本鬼瓦系(1)——

The World of Ogre-tile Makers

— “Kuroji” as Fired Tiles: the Yamamoto Onigawara Line (1) —

高原 隆

TAKAHARA Takashi

愛知大学国際コミュニケーション学部

Faculty of International Communication, Aichi University

E-mail: ttakashi@vega.aichi-u.ac.jp

Abstract

The third group of ogre-tile makers of “Kuroji” in Sanshu is the Yamamoto Onigawara Line. However, the Yamamoto Onigawara Line has a double waver in terms of the patriarch. So I did not put the name of the patriarch to the third group. What I mean by “a waver” here designates a kind of declination to refuse to identify things. There are two wavers: One is the waver of blood and the other that of skill.

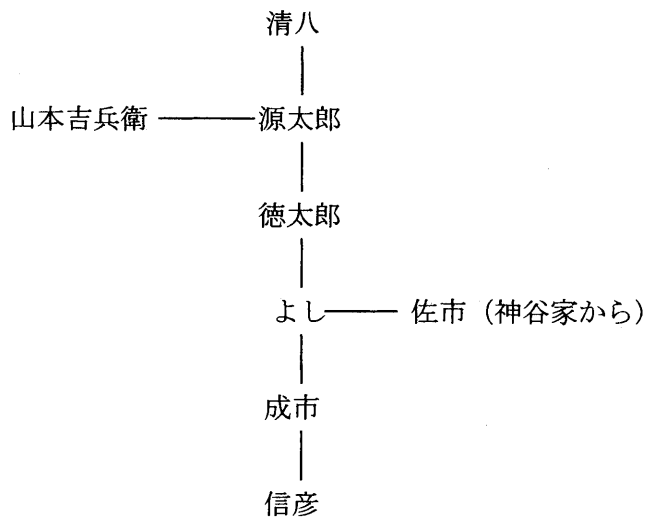
The first waver is related to the relationship between the Yamamoto family of the third group and that of the Yamamoto Kichibei Line. The conjecture is if these two Yamamoto families are the same lineage or not. The second waver is concerned in the skill and/or art of ogre-tile making. The key person is Yamamoto Saichi who is the grand father of Yamamoto Nobuhiko. Saichi founded the Yamamoto Onigawara but he is not a direct descendant of the Yamamoto family but an adopted person to the family. Furthermore, he is not an ogre-tile maker called “oniitashi.” That is to say that there exists no clear oniitashi as being a center of this group. As a result, the origin of the Yamamoto Onigawara Line is not clear but rather vague or hollow.

三州鬼瓦を製造する第3のグループが、山本鬼瓦系である。第1グループが山本吉兵衛系、第2グループが神谷春義・岩月仙太郎系である。第1、第2グループとも創始者である元祖がグループ独自の鬼の流儀を伝えている。それ故に、山本吉兵衛、神谷春義、岩月仙太郎といった人物はグループに属する人々にとっては始祖として語り伝えられる伝説上の人物になっている。ところが第3のグループ、山本鬼瓦系は元祖において二重の「ゆら

ぎ」がある。このことが先の2つのグループのように明確な人物を元祖としてグループ名に置くことを躊躇させるのである。

ここで言う「ゆらぎ」とは物事の同定を拒むずれを指す。そこには血のゆらぎと技のゆらぎが存在している。まず第1番目の血のゆらぎについて見てみよう。「山本鬼瓦系」と「山本吉兵衛系」を並列させると見えてくるものが、この二つの山本家は同じ家系ではないかという憶測である。幸いにも山本家の子孫、山本福光（86歳）に平成15年11月1日に会い、話を聞くことができた。その上、福光自ら作成した山本家の家系図を見せてもらい、二つの山本家の繋がりが明白になったのである。結論だけを先に述べると、山本鬼瓦工業(株)現社長の山本信彦から五代遡ると、山本清八にたどり着く。その清八の長男が源太郎で山本信彦から四代目の高祖父になる。源太郎の弟が山本吉兵衛である。吉兵衛は当然のことながら新家として分家している。つまり血の上では山本鬼瓦と山本吉兵衛は繋がりがあることになるが、直接の繋がりはではない。その点が一つの「ゆらぎ」となっている。

山本家家系図



もう一つは技のゆらぎである。問題になるのは山本信彦から二代遡る祖父の佐市である。佐市は山本鬼瓦を始めた本人であるが、直接の源太郎の子孫ではなく、山本家へ養子として入っている。さらに佐市本人は鬼板師ではなく、鬼板師の職人を集めて山本鬼瓦を起こしている。つまり、第1、第2グループのような核となる明確な鬼師としての人物が不明・不在で、ここに技の「ゆらぎ」を作っている。また佐市は養子であることから血の「ゆらぎ」を成しているともいえよう。

このような二重、あるいは三重の「ゆらぎ」の中から興ってきたのが第3グループをなす山本鬼瓦系である。山本鬼瓦系は山本鬼瓦工業、鬼金、鬼栄、光井製鬼所、伊藤鬼瓦店

という各鬼板屋から構成されている。このうち黒地組合に所属する山本鬼瓦工業、鬼金、鬼栄をここでは取り上げ、山本鬼瓦系の黒地の世界を描くことにしたい。

山本鬼瓦工業(株)

山本鬼瓦系の中核を形成しているのが山本鬼瓦工業である。現社長は三代目山本信彦である。信彦は山本鬼瓦について次のように述べている。

私は実際は三代目なんですけど、この仕事をしてきました。私の家は鬼師としては有名な山本吉兵衛さんの流れを汲んだらということ、えー、一旦はいろんな、あの一、職業、コンロとか瓦とか、色んなことをやっとならしいんですけど。でも、先代が、あ、山本吉兵衛という人が、この高浜の鬼瓦の先祖ということ、えー、その近くにも石碑がありますけど。三代前のおじいさんが再興しようということ、鬼瓦屋をまた新たに三代前から、山本佐市さんという人ですけども、その方が始められて、それで僕の親父が継いで、山本成市さんが継いで、僕が三代目です。そういう系図を辿っています。

この話だけを聞くと、山本吉兵衛が山本鬼瓦の直接の元祖であると大概の人は考えるであろうし、私自身もすぐにそう思った。ところが運よく、信彦の父成市の実弟である山本福光に会うことができた。当時86歳であったが、^{かくしやく}鑿としており、話すことが実に明晰で、山本鬼瓦について貴重な話を伺うことができた。しかも福光本人が正真正銘の鬼板師であり、かつ、自ら始めた新家としての山本鬼瓦の親方であった。教養が言葉の端々ににじみ出ており、深い探究心のある人のようであった。その実例が福光自ら調査した山本家の家系図である。合計4枚の詳しい系図を見せてもらい、そのコピーを手元に持つことになって、山本鬼瓦の位置が具体的に見えてきたといえる。

中心になる人物は初代山本鬼瓦、山本佐市である。佐市は明治11年(1878)生まれで、昭和41年に亡くなっている。まずポイントになることは佐市が養子であるということである。福光は次のように語っている。福光にとっては佐市は実の父である。

大体、山本佐市っていうのは養子ですのでね。鬼金(神谷金作)の親父(喜之助)と兄弟。もとは神谷佐市のはずです。

佐市が山本家に養子に入ることによって、その後、兄、喜之助の息子の金作(後の鬼金)が山本鬼瓦へ小僧として入り、山本家と神谷家がつながり、現在の山本鬼瓦系の中核的なグループが形成されるのである。ところが佐市の入った山本家は鬼板屋ではなく元々はタ

バコ屋であった。

タバコなんか売ってたんだ。兄貴（成市）にも聞く機会がなくて、（なぜ、佐市が鬼瓦屋を始めたかについて）、よう聞かんじやった。親父は大体物言わんほうで、子供はほっとけっていう方だったもんで、だから……。

私の子供の頃もまだ売ってた。ずーっと売ってたんだね。それがいつの間にか鬼瓦屋さんになっちゃった。うん、やりながら、店やりながら鬼をやったんだ。道通りで（タバコを）売ったりながら、奥で鬼をね。

「もともとはそのタバコ屋さんとか雑貨屋さんのほうが先ということですかね」と聞くと、

そうそう、山本のほう、源太郎のほうはね。

この山本源太郎が佐市から見ると義理の祖父に当たり、山本家の祖先になる。そして源太郎の弟が山本吉兵衛なのである。ここで明らかになるのが、兄源太郎の家業と、弟吉兵衛の鬼板屋とは別物であることであろう。文字通り山本吉兵衛は旅職人となり鬼板の技術を身に付け、後に高浜に帰り、分家して鬼板屋を自ら始めたのである。

佐市は事実上、鬼板屋ではない源太郎の山本家に入ったにもかかわらず、鬼板屋を始めたことになる。しかし佐市は吉兵衛とは違い、鬼板師ではなかった。

大体、佐市は鬼板師じゃないんですよ。あの一、出たところ、昔は土器ね。コンロとかそういうものやっとして、ほいでたまたま縁があって養子に来た。

ただ福光の言うように佐市はまったく土の世界とは無縁ではなく、佐市の実の父、神谷彦七の家は土器屋であり、佐市の兄、仙太郎も同じく土器屋である。さらに父、彦七は神谷家の養子であるが、彦七の実家の神彦家は瓦屋との関係が深く、神彦家の直系は現在のカミヒコ瓦へと繋がっている。このような環境を持つ佐市ではあるが、福光は次のように言っている。

どうして（鬼瓦屋を）始めたのかわかりません。はっきり聞いとりません。

このように佐市の山本家婿入り後の鬼板屋創業については現時点では不明のままである。つまり、佐市について知っている関係者からはなぜ佐市が鬼瓦屋を始めたのかについて

ての話は伝わっていないことが判明した。ここからは私個人の推測になる。佐市の親元である神谷家は土器屋や瓦屋関係の仕事が多くしている家系である。それ故、佐市は土の世界に馴染みが深かったものと考えられる。ただ、神谷家においては「土の世界」という意味では普通の人よりはるかに身近であるが、鬼瓦とは直接の関係はない。そういった佐市が山本家へ養子に入って鬼瓦屋を始めたのである。何かがあって佐市は鬼瓦屋を始めたのであろう。その主要な原因は義理の祖父に当たる山本源太郎の弟、山本吉兵衛からの影響以外に考えられそうにない。繰り返しになるが、山本家へ養子として入籍して初めて、佐市は鬼瓦を始めたという事実がある。また佐市が山本家へ入籍した日は明治36年（1903）5月21日と山本家の戸籍にはある。一方、山本吉兵衛は明治37年（1904）4月10日に74歳で亡くなっている。25歳前後の佐市と74歳頃の吉兵衛が僅かな期間ではあるが出会い、佐市が鬼板屋を興すきっかけになった可能性は高い。鬼板屋経験のない佐市に対して吉兵衛は何らかの助言なり援助をしたのではないかと思われる。現代のような素人でも始められるといわれるプレス時代ではなく、手造り鬼瓦の時代である。職人の斡旋なり何なり具体的な話が二人の間であったものと考えなければならない。

福光が「佐市は本当の鬼板師じゃないんです」というので、その意味を尋ねると、

鬼の技術があんまりなかった。……無いという事です。要するに、その当時、あちらこちらに、あの、鬼板師っていうものがありますわねー。鬼板師の職人を入れて、ほいで、鬼屋やとったようですねー。

私が子供のころにはだいたい何人か居りました。ええ、ほいでー、要するに、鬼を作っては、名古屋の間屋へですねー、送って、商売しとった。

「何人ぐらい職人さんが佐市さんの下にいらっしやいましたか」と聞くと、「ほーだねー、6、7人居ったじゃないですか」と答えている。つまり佐市は鬼板の技術を持たない鬼板屋の親方であったが、経営面での才覚に長けていたのである。（第1図参照）

名古屋に、当時、山彦商店っていうのがあった。それが名古屋の屋根瓦をいじっとる人ん中ではねー、名古屋でも優秀な間屋だったわけです。そこの仕事を主体にやとったわけですね。そこの山彦商店っていうの……大将に佐市が気に入られて、ほいで、そこの注文全部、鬼瓦のね、注文は受けてやとったわけですね。

わしら覚えがあるのが、親父がそうやって商売やとって、昔は、あの、盆と正月し



第1図
初代山本鬼瓦 山本佐市

か決算しないでしょう。それだから、わしの親父が山彦商店へ、売ったもの、商品、あの、金をもらいにいくと、非常に気に入られとってね。ほいで他にいくらでも、その一、何だなー、お客さんが居るわけですよ。盆と正月前は。ほうすると、大將が「こっち来い」、「こっち来い」って言われて、あんた、何じゃなー、他の人は放っておいて、番頭さんがやっというて、大將が連れてって、奥へ連れてって、ほいで……。

佐市はこのように大きな得意先を持つ鬼板屋の親方であった。それ故に7名ほどの職人を抱えるほど山本鬼瓦を発展させることができたといえよう。ただ佐市には変わった癖があり、それが逸話として残っており、息子の福光がその話しをしてくれた。佐市の人柄が見えてくる。

どうい関係でああいう、何つったかわからんけど、要するにお寺参りを。お袋が死んだ、死ぬ前からかどうか。私は、母親が何にしても、学校へ上がる前に死んどるもんですから、その頃か、その為かどうかわらんけど、お寺参り。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。「仏の佐市」って言われるくらい。

お寺参りやって、ほいで、要するに、なんだやー、お坊さんの講話聞きに行ったりね。そういう関係の好きな人がお客さんに来る。大体、その、仏教のなんだん、本願寺の系統の話であったりしてね。

あんまり物は言わなんだけど、始終、なんだなあ、「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、ナンマイダ」って言いよったです。

瓦組合で、組合があって、組合の旅行なんかにね、私が行けんで、親父に一回行ってもらったことがあるんです。そしたら、後で、みんなに怒られてしまった。何でって言うと、要するに旅行行ってひと晩泊まってくるでしょう。その宴会が始まるところでだねー、その時、とてつもなく、「南無阿弥陀仏」って言い出した。口癖でねー。後で怒られちゃった。まあ、「親父代わり出しちゃいかんぞ」って。そういう人間だった。

三代目山本鬼瓦工業の現社長の山本信彦は佐市の孫に当たる。息子の福光の話と合わせてみると、佐市という人の輪郭が浮かび上がってくる。

祖父は私が高校3年で大学受験真っ盛りの頃死にました。88歳でした。祖父の印象は真に信仰の人でした。私の子供の頃、まず朝の祖父の「南無阿弥陀仏」という念仏が目が覚めました。一日、朝夕はもちろん、いつも念仏を唱えていました。

彼は山本家へ婿として入り、山本家の先祖が山本吉兵衛という事で、改めて、鬼瓦屋になろうと決意して、仕事を始めました。その前は「いわし売り」と聞いています。

当時は、7、8人職人がいたように聞いています。彼の技量はほとんど知りませんし、作品も残っていません。彼は職人というより、経営者だったと思います。彼は皆から金を貸してくれと頼まれ金貸しもやっていたようで、借金のかたにもらったという土地もあります。今、会社の土地も、他の借地も、佐市の財産です。彼は信仰と土地という財産を残してくれました。

以上のように、佐市は直接の山本吉兵衛の家系ではないが、吉兵衛の兄である源太郎の孫、「よし」の娘婿として山本家に入ったことにより、直接にしる間接にしる、吉兵衛からの影響を受けたものと思われる。佐市の出である神谷家が土器や瓦の仕事に深く関わる家系であったこともあり、佐市は独特な「ゆらぎ」の中で触発され鬼師の世界に入ることにしたものと思われる。そして佐市は経営者としての才覚があり、山本鬼瓦の基礎を築いたのである。

佐市には5人の子供があり、男が成市と福光の二人であった。長男の成市は明治39年

(1906) 生まれで、平成11年(1999)に他界している。次男の福光は大正7年(1918)に生まれており、兄の成市とは12歳ほど歳が離れている。それ故、福光が子供の頃には、成市は山本鬼瓦で働いていたという。ところが佐市の山本鬼瓦は他の鬼板屋と同様に大東亜戦争中に変容する。二人の兄弟のうち、会うことができたのは弟の福光であった。しかし運の良いことに福光が直接、鬼板屋を経営したことがあり、山本鬼瓦の変容について詳しく語ってくれた。

子供の頃に大病して、ほいで中学をあきらめさせられて、家にしばらく居ったんですよ。あの、昔の徴兵検査までね。その頃は体丈夫だったもんだから、私自身は兵隊で取られて、徴兵検査で取られて、当時の関東軍ですね。満州に行って、そこで3年3ヶ月。で、帰って来て。来た頃にはね、もう、早や、鬼瓦がねー、全然売れないんですよ。戦争だったから。

そいで、それから、また私1年半ば居って、家に。召集でまた行っちゃった。ほいで、終戦後まで居ったんだ。

福光が戦地から高浜へ帰って来たとき、鬼瓦をやっていたのは上鬼栄のみであったという。

年寄り夫婦で、やっておられた。僅かに、ぼつぼつとね。

後はほとんどやってなかった。鬼やなんか全然売れなかったらしい。戦争中に鬼屋がみんなやめて、瓦、普通の瓦屋に変わったり、なんかしとったらしい。

当然のことながら、山本鬼瓦も戦時中から戦後にかけて、鬼瓦屋から瓦屋に変わっていた。そういった状態のところへ福光は2度、戦地から帰っており、二重の確認を兄の成市から取っている。第1回目の戦地からの帰国は、成市からのその確認に基づいている。

私が兵隊に行つとる時に、私はねー、その一、満州で当時の関東軍司令軍の軍属になろうと思った。帰って来る少し前からそういう話があったもんだから。で、家に手紙出したんですよ。兄貴、体が昔からあんまり丈夫じゃなかったで。

手紙出したらね、「とても俺は家の仕事やれんから、お前戻って来てやれ」と、「お前にやらせる」と、こういう返事が来たもんだから、ほいで満州から返った。

当時、福光が満州から帰ってみると、成市は家の仕事はせずに、公職に就いていたという。

その頃に兄貴が、あんたー、公職でねー、公の仕事で出ちゃって、その頃に、当時は主計と言ってましたけど、毎日のように当時の役場に行っちゃうわけですよ。

ほいで私が1年ぐらい、瓦、主でやっとなだけども、そいでその内に、あんた、なんだ、召集令状一銭五厘でまた行っちゃったわけ。

第2回目の確認は福光が終戦後、昭和21年（1946）に日本に帰って来た時である。

さて何やろうかなと思って兄貴に、「お前、鬼瓦始めるかどうか」って言ったところが、「やらん」って言ったもんだから、私がね、新家でおりながら、始めたわけですよ。

場所は現在の山本鬼瓦のある所ではなく、その裏手に当たる岡崎信用金庫のある辺りだったという。この事は佐市の興した山本鬼瓦は、長男の成市の代で一度、途絶えていることを意味している。そして成市の了解の下で、弟の福光が鬼板屋を終戦後新しく始めたことになる。

ところが、昭和34年（1959）9月26日に伊勢湾台風が三河地方を襲い、鬼瓦や瓦の生産地が直接、膨大な打撃を被ったのである。この天災がきっかけで、福光はなんと昭和36年にあっさりと鬼板屋を廃業してしまうのである。

私がやめたのはねー、兄貴が、私知らんどううちに、ちょっと職人入れて始めたりしたし。同時にねー、伊勢湾台風。伊勢湾台風がね、の時にはね、鬼瓦というものは全然売れない。瓦足らんばかり、鬼瓦は全然売れなかったんですわ。

それと同時に私要らんこと考えちゃったんですよ。こらー、鬼瓦ってもんは装飾品だでね。今から屋根の構造が変わってきて売れない。ほとんど駄目だろうと。ということを考えて、伊勢湾台風後に兄貴に私がやっとな、要するに鬼を作る型、石膏型だとかそういうものはね、みんな兄貴のほうに返してやって、わしが使った職人も、3人、兄貴の方へ。

その4年後の昭和40年（1965）に成市の長男、信彦が大学を卒業してアイシン精機へ

勤める予定だったのをやめて、山本鬼瓦へ戻って入ったのである。このように、福光は、伊勢湾台風によって起こった鬼瓦の一時的な不況のため、悲観的に考え始め、鬼瓦に見切りをつけたのであった。屋根修理用の瓦はあるが、鬼瓦はさっぱり売れない状態だったという。一方、ほぼ15年近くの空白期間を経て、山本鬼瓦は幾つかの僥倖に恵まれて、息を吹き返したといえる。福光の存在を抜きにして現在の山本鬼瓦は考えられないといってもいいだろう。山本鬼瓦の伝統が福光の鬼板屋を経由して伝わっているからである。移籍した職人は3名で、石川類似、神谷豊国、杉浦義照であった。

山本福光は終戦後、兄、成市に代わって、新しく鬼板屋を始めたことからわかるように、鬼板師としての心得のある人である。鬼板師になった理由は小さい頃から体が弱く、中学校へ行くのを諦めたからだという。つまり旧制の高等小学校を出て、佐市の山本鬼瓦へ小僧として入ったのである。福光にとっての鬼板師としてのブランクは大東亜戦争の時、二度にわたって徴兵された約5年半の期間であり、20代前半で徴兵に取られたと考えられるので、福光は十分に鬼板師としての基礎ができていたものと思われる。ただ兄、成市がいたので、山本鬼瓦の親方として継ぐことは当時念頭になく、職人として腕を磨いていたものと思われる。戦争中および終戦後の二度にわたる兄成市の「鬼瓦屋をやらない」という意思表示に対して、福光がとった鬼板屋の開始という行動は二人の兄弟の鬼瓦に対する思い入れの違いを示していると思われる。福光が誰に鬼板の技術を教わったか尋ねてみた。(第2図参照)



第2図
山本福光

そりゃーまあ、親父のところに居ったもんだから、そこに居った職人さんら等に習った。その頃は誰ってこと無しだわなあ。何人か居ったもんですから。

それから私が始めてからね、石川類似¹⁾っていう人だったですよ。その人が、私が始めてから私のところへ来とってくれて、で、今信彦のところにいる、わたしのところの小僧（杉浦義照）も、何にしても、その人に主として教えてもらったわけですよ。

福光は文字通り一から始めている。このことから福光が職人であり親方であったことがわかる。（第3図参照）

もちろん最初は一人ですよ。最初は新しく始めるもんだから、最初は本当、白地作って、白地を瓦屋さんを買ってもらって、ほいで、やっとうちに窯を作った。

始めたのは（昭和）22年くらいからかな。21ちょっと、ないしとって、ほいで白地をわしゃー始めたんで。最初は一軒だけ、あつた。最初は、白地作って、白地を瓦屋さんから買ってもらって、ほいで、やっとうちに窯を作った。白地をしばらくやっとして、何しても戦後のあんた、金のない頃だもんだから、東京



第3図
恵比寿大黒 山本福光作

の間屋さんまで行って、あんた、窯作る金借りて来たんだもん。窯作る金も無いもんだから。

窯を昭和24年になって築いたというが、窯を築いてから仕事が大きくなり始め、職人や小僧を入れるようになっていったのであった。職人の石川類似の場合について語っている。

石川類似さんっていうのは、ずーっと歳が上だもんだから。昔、信彦のそこ（山本鬼瓦）に居られ、しばらく居ったかな。ほんで戦争でやめとって、ほいで、その、小僧、小僧の当時のわしが、なんだ、兵隊前から、その一、知っとるわけですよ。ほいで、その人、わしが始めてから頼んでね。ほいで来てもらうようになった。割合にいい人でね。

多い時で小僧を入れると7人ぐらい居たという。すべて手造りの時代である。その小僧の中で今も鬼板師として活躍しているのが、福井謙一と杉浦義照である。福井は独立して、福井製陶を継いでおり、杉浦は現在の山本鬼瓦で職人として働いている。福光は自分の経営する山本鬼瓦でのその二人の修行時代を話してくれた。

やっぱり、修行は、あんた、なんだな、修行次第で、心掛け次第で。ほや、あの一、福井と一緒にやって。性格が違うね。福井君と杉浦義照とはね。性格が全然違う。

だけど、二人で競争しとるもん。一緒くらいに入って、二人で競争しとるもんだから、お互いに腕が良くなるうというね。

その当時のみんな、やる気で来とるもんだから。ええ、遊ぶ時は遊ぶですよ。うん、特に福井君なんか割りによう夜なんか遊びに行きよった。

ほんでなんだね、やり出して、始めてみると、その何だ一、その人の、素質っていうものはなかなか分かりますよ。うん、土いじって、鬼を作る素質というものは。なんだ、同じように入っっても、腕のええ、良くなるのと、割に腕の良くなるのと、まあ、あるですよ。

福光は良い鬼板師について次のように言っている。

結局、職人同士で、お互いに話し合っ、「この鬼がいい」だの、「この鬼がいい」だと、そういう事の話が真剣に話し合える人が、何だねー、ようなるですね。誰が教えるでもなくて、自分で、こうやろうという気が無いと駄目だね。

インタビューの終わりあたりに「山本鬼瓦をやり始めて、山本吉兵衛を意識したことはありますか」と聞いてみた。

うーん、その当時は思わなんだがなー。ほりゃー、結局、自分が鬼を、鬼瓦をやろうと、戦後だよな、本当に意識したのは。でもそういう感覚は割合にない。無かったがね。そういう話は親（佐市）が全然しないもんだから。兄貴（成市）もそういう話はしない。ほいだで、そういう感覚は割合無かったね。

成市と福光とが兄と弟という関係にもかかわらず記述が前後してしまった。山本鬼瓦の流れから言うと、まず戦争中に佐市の山本鬼瓦は鬼板屋から瓦屋になり、そこで鬼屋として中断している。戦後、弟の福光が兄、成市の鬼板屋の放棄を確認して昭和21年に始めた「福光の山本鬼瓦」が昭和36年まで続く。ところがその前の年辺りから放棄したはずの成市は鬼板屋を始めたのだった。そしてその成市に福光は、職人を含めて道具一式を譲渡したのである。つまり、山本鬼瓦の実質上の二代目は福光であった。成市は昭和36年に福光から「福光の山本鬼瓦」を譲り受ける頃に鬼瓦屋を始めたのである。それ故、成市は大きな流れからいうと、実質上、三代目と言って良い。山本家本家の系図上からは佐市から数えて二代目なのであるが、こういった事に成ったのは、やはり、成市と福光の鬼に対する姿勢の違いであろう。成市を父とする現山本鬼瓦社長の信彦は成市について次のように語っている。(第4図参照)

父は明治生まれで、大変正直な人でした。父の印象は家業より、民生委員、保護士在任40年で、勲五等の賞を貰った如く、公の仕事をした人という印象です。「人の為、世の為になれ」というのが彼の口癖でした。

仕事は叔父山本福光が戦後独立して鬼瓦屋をやるという事で、父成市は、兄弟が同じ仕事をしては良くないと思い、瓦屋に変わりました。昭和40年叔父が鉄工所に転職した時に、また、鬼瓦屋に戻りました。

ともかく、成市は争い事が大嫌いで、まさに平和主義者、正義の人でした。皆からも「成市さん」と慕われ、非常に信頼された人でした。こと、家業においてはそんなこ



第4図

第2代山本鬼瓦 山本成市

とで、公の仕事が多く、仕事も職人任せのところが多く、図面も職人に引かしていました。鬼師としての腕（技量）もそんなに良くなく、家紋は良く作っていましたが、あまり大きなものを手がけた印象はありません。

市場としてはほとんど関東で、集金に行く時、よく東京に連れて行ってくれました。父の頃は東京の間屋さんの力が大きく、ほとんど問屋へ製品を貨車で送って行きました。彼は鬼と共に三州瓦も多く問屋さんに送っていました。その頃の支払いは現金で、腹巻の内に現金の札束を入れてよく夜行列車に乗って帰って来ました。

父、成市のお蔭で、「山本さんところは信用してもいい」という信用という財産を頂きました。

弟の福光と、息子の信彦の話を総合すると、成市は人のために尽くす公の仕事に興味と情熱を持って生きた人であり、家業の鬼瓦作りには興味を余り示さず他人任せのところがあったようである。

山本鬼瓦にとっての幸運は、昭和40年に息子の信彦が山本鬼瓦へ入ってきた事である。信彦は職人として鬼板の技術を身につける十分な時間を持つことなく、成市をサポートする実質上の親方になっていったものと思われる。第三代目山本鬼瓦（福光を第二代目とすると第四代目に当たる）の山本信彦は昭和21年生まれである。現在は山本鬼瓦工業の社

長として活躍している。信彦の子供の頃の話からは、鬼板屋の当時の生活が浮かび上がる。

小さい頃から、結局瓦屋とか、そういう鬼瓦屋、自分の家業でしたんで、そういうことの意識は、あの、瓦屋を継ぐっていう意識はなんかあったみたいで、家では何か、そういう意味での土いじりはやっていました。

もちろん遊びで。ええ、遊びもあるし、あの、僕らの小さい頃は、あの、小学校の頃でも、結局、まあ、作るということよりも、窯、窯を積んだりとか、窯の手伝いをしたりとか、そうして小遣いを頂いて、というそういう生活してきましたし。あの、中学校とか高校の頃は、あの、熱い、熱い窯を出してそれで、あの、高校へ行くとか、そういう、そういう時代でしたんで。ええ、だから自然にこう焼き物とかに、体に染み付いて来たっていう感じですけどね。ええ。

職人さんとね、横でこうなんかってことはね、ええ、子供の頃からやってましたんで。その頃で（職人さんが）5人くらいですかね。ええ。隣でなんか、いじったり、あの、したりして。こう邪魔に、邪魔がられたとか、そういう、ですよ、昔。

信彦が高校生になるころには日本社会はサラリーマンの時代となっており、企業に勤める人が全盛といった状況に入っていた。信彦は鬼板屋になる道を選ばずに、名古屋市立大学経済学部へ進み、昭和40年（1965）に卒業している。その頃の気持ちを次のように述べている。

大学出た時に、もう、その頃に職人さんも2、3人以下で、まあ、ちょっと、ちょっとどっちかっていうと、そんなに、人数もちょっと2人かな、3人かな、位にちょっと減って……。商売としては、職業として、やっぱり地道にやっ行って行くんならいいけども、僕もちょっと大学でいろいろ知ってて、学んできちゃうと、これ商売じゃないなって。

それで、あの、まあ、アイシン精機、その頃自動車産業が花だったんで、もう、「サラリーマンじゃなければ人じゃない」って言うくらいということで、悩んで、「家事やるか」って言やあ、「ようやるなあ」って言うような……。

信彦は大学を卒業するときに、家業を継ぐべきかサラリーマンになって企業に勤めるか

で、かなり悩んだ様子である。そして一度は企業に入る決心をし、アイシン精機という会社に入社し、研修を受けていた。ところが信彦は何と決まっていた入社を取り消し、家業を継ぐという急転回をしている。それほどまでに家業を継ぐことで心が揺れ動いていたのであった。その揺れる信彦の心を家業の鬼板屋へ引き戻したのは、成市の説得ではなく、「山本吉兵衛の家系」という伝統の力であった。信彦はその転身のきっかけを話してくれた。

親父さんの友達といろんなこと話しとって、何かえらいこう寂しがったんだよね、これが。たとえ、2, 3人でもやっぱり一応はあの元祖と呼ばれる山本吉兵衛、あの、それを継ぐ系統ということで、三代前にまたちょっと再興したんで……という意味合いを、友達のねえ、杉浦さんという人と話したんだ。それを聞いて、まあ物語みたいで……。

山本吉兵衛が山本鬼瓦と繋がりが有るか否かは初代山本佐市のところで述べたように、吉兵衛の晩年の年があくまで可能性としてあるのみである。山本吉兵衛の鬼瓦の技術や流儀は弟子である職人に受け継がれており、佐市には直接には流れていない。確実な繋がりとはいえ、佐市の義理の祖父、源太郎が吉兵衛の兄であるといった事実なのである。ただ山本鬼瓦が山本吉兵衛と佐市との接触によって起こった可能性は否定できない。それを私は「ゆらぎ」と呼んだ。信彦の場合も山本吉兵衛に触発されて、家業を継いでいるところが有形・無形の伝統の重みなのであろう。佐市の場合と似ているところがある。始まりに「ゆらぎ」が存在している。

信彦は2, 3年仕事場で働いた後、販路拡張のために営業に出ている。信彦は家内工業的な鬼板屋からの脱皮を図ったのである。そのことは信彦の「職人への道」から「社長業への道」への転進をも意味している。

やっぱり販路という面がないと。僕らの頃はそんなの全然無かったですよ、そんなの。その頃は、もう、一番凄いの、丸市さん。丸市さんは今、もうやってないけどね。²⁾ものすごいたくさん、職人さん、販売力がね。販売力のあるところを、いい仕事取って来ないと、職人さんにも影響が与えられないし、まして、そのね、その仕事自体がね、行き詰っちゃう。

信彦は身近に丸市という成功している鬼板屋の例を見て、販売力の重要性を認識し、そのための努力を始めたのである。

それで僕はとにかく25くらいの時にね、皆さんに迷惑をかけないところへ、奈良とか京都とか、大阪とか。この近辺は今までの市場があるもんで、皆さんのお客さんがあるもんで、それも全然触らなくて、それで、外へ、皆さんの外へずっと回って行ったんですわ。

信彦は最初、営業上の戦略として三河以外の地へ足を運び苦勞して販路を拡張して来ている。ただ信彦の長所は単なる販路拡張ではなく、販路拡張と合い間って、山本鬼瓦の技術改善、そしてそれに伴う山本鬼瓦の特徴作りに意識して取り組んだことにある。それが今日の山本鬼瓦を築き上げる重要な要因となっている。

結局、うちの仕事としては日本全国、三河だけこら辺だけで仕事やっとなるわけにゃーいかんってことで、全国的な仕事をやりたいって事で。まあ、あの、奈良とか京都にいろいろ、そちらに出て行った時に三河だけの特色の、経の巻の足にしても、荒目、吹き流し、若葉、それから経軸っていうんですけど、経の巻の「てり勾配」とかが全然成っていないと。

三河だけの、あの、お山の大将では、もう、全然全国的なレベルじゃないということを実際に、20歳代の時に奈良や京都で行って見て来たのと、実際に奈良や京都から仕事が請けられるようになった時に、最初は三河、もう、こっち、三河のものが一番いいだっってことで出しとったんですけどもね。うーん、とんでもないと。

いろんなことを、あの棟の線とか、それから正面から見た時の他の物とのバランスを考えた時の足のデザインがもう全然なっていないと。そりゃー、やっぱり歴史のある京都や奈良というところ、滋賀県とかいうところは、やっぱりそれだけ時代、七代とか八代とかいう事で瓦屋さんやってみえる人が多いんで、そこらへんの、もう、レベルが全然、その時代考証とかね、そういう事とか。

三河のその、一つずつの製作する技術は、あの、テクニックは有りますけども、全体の形という事と、デザイン性が、あの、他地区と比べても見劣りがするっていう事を痛感して。

信彦は販路拡張を三河以外の特に伝統ある京都、奈良、滋賀などのほかの地方で行うことを通して鬼瓦を見る目を養った。そして鬼瓦の位置づけを、「個から全体」、「三河から全国」といった意識変容を体験し、信彦本人のみならず、山本鬼瓦全体へと波及させたので

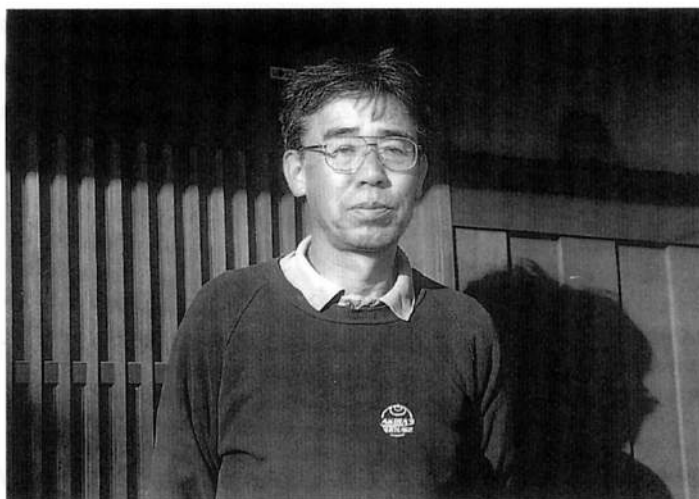
あった。信彦は例を出しながら次のように説明している。

とりふすま³⁾鳥衾³⁾っていうのがあるんですけどね。鳥休み。鳥衾っていうものは、あの、その、それが最後の線なんですわー。それが、全然、その最後で折れちゃうと。その大工さん、その屋根屋さんと打ち合わせをして、屋根屋さんがどういう風な線を作って来るかっていう、それに準じたものを作らないと、全然意味が無いんで。

まあ、三河は、あの、そういう事すら知らなくて、全体の繋がりという事の中の商品だという意識が無かった。鬼は鬼で別個と思っているから。たとえばその鳥休みだったら、その棟の線に対して最後の線をどうするかっていう、そういう部分がまるっきり欠けている。

信彦においては「部分」から「全体」への意識が非常にはっきりしており、鬼瓦を単なる屋根の飾りと考えず、屋根全体、建物全体の美を大切にしている。そして信彦のこの鬼瓦に対する姿勢が山本鬼瓦のデザインに活かされ、商品としての売りになっている。(第5図参照)

経の巻にしても、その最後の経軸の「てり」⁴⁾が悪ければせっかく屋根屋さんがきれいに作った棟が最後で死んじゃうっていう部分。今はもう、それを随分もう見かける。



第5図
第三代山本鬼瓦 山本信彦

特に大きなものの屋根はもうシルエットなんで。もう、一枚一枚がきっちり葺いてあるなんてものは。屋根は下から見ても見えないことなんですけど。三河の職人さん、まあ、鬼師に限らず屋根屋さんも、もう目の前で見える仕事を重点にして、下から、遠くから見たときのそういうデザイン性とか線とかがっていうものがまるつきりになってない。

そこらへんを、あの、勉強させていただいて、うちはそういう所に特色を持って、あの、屋根屋さんと同じ、その屋根屋さんと同じ、直にお話してその線を描いていただくなり自分で考案してっちゅうことをやって来たのが特色。

別の見方をすると、信彦は三州鬼瓦の持つ伝統に柔軟性ないし、多様性を取り込み、他地域の伝統にも対応可能な体制を山本鬼瓦において整えたといえる。そのための手段が屋根屋さんという現場と製造元である山本鬼瓦とのコミュニケーションの重視なのである。

ここら辺の、この地方の屋根屋さんの葺き方だったらね、まだ何とか見れるけれども、ちょっと関西とか、そっちへ行くと、まあ、まるつきりもう。

土地柄変われば、(屋根の)流れとかが変わりますから。ええ。「所変われば品変わる」で、全然違いますんで。

それをただ在るものを出しとるってことだと、屋根屋さん、その一、お施主さんに対しても失礼だし、屋根屋さんに対してもね。僕らは、まあ、今まで何回もやって来て、それは何回も作り直されとるもんで。

このように販路拡張を着実に進めながらも、現場の声、苦情を大切に、商品を改善させていったのが山本鬼瓦である。個々の現場に生産を対応させる体制を確立したのである。各地の多様な鬼瓦の伝統に柔軟に応じる姿勢を通して、職人の技量の向上が同時に波及効果として起こった。そして販路拡張を伴うと起こりがちなプレス生産へ走ることを避け、信彦は手造り鬼瓦に固執した。結果、当初の手本であった鬼瓦屋の丸市のように多くの職人を抱える鬼板屋へと変わっていったのである。

現在は鬼瓦を作る職人が10人、窯のみをする人が1人、事務員が1人と、信彦と妻の千浪を入れた14人体制を採っている。山本鬼瓦では自社製品としては手造り一本で、売り上げの8割を占め、100パーセント社寺関係という。残り2割が外注で注文を調整し、主に白地のプレス製品を購入し、焼成して出荷している。三州では手造りの鬼瓦屋として

は最大規模の鬼板屋になっている。

■ 1990年代半ば以降、特に阪神大震災（1995年1月17日）を境にして、大手ハウスメーカー主導の屋根の洋風化、つまり平板瓦の流行は伝統的な和瓦対応型の鬼瓦需要を急激に減少させて来ている。事実、新築の民家はほとんどハウスメーカー製の、今風の、何となくモダンで、ハイカラな感じのする建物になって来ている。（第6図参照）

その感覚を決定付けているのは建物の外壁のみならず、屋根なのである。内装は外部からは見ることができない。ところが建物の施主、つまり新しい家を購入する人は内装のほうへ意識が行き、外装は二の次的なものになり、屋根にいたっては気にする人はあまりいないのではないかと思う。それ故、あっと気がついた時は、どこもかしこも洋風な、ハウスメーカー風の家になっていたという事態に至っている。逆説めくが新しい和風建築の家が新鮮な印象を与える昨今になってきたと思う。鬼板屋を歩いて回っているうちに日本の屋根に何が起きているのかを生産者の声を通して気づかされた次第である。信彦は民家の平板瓦化に対して次のように語っている。

2000年を超えて、もっと変な風の洋風化みたいなこととかね、そうしてっちゃうと、



第6図
新築家屋（街でよく見かけるハウスメーカー製、
平板瓦屋根を持つ家）鬼瓦無し
愛知県豊橋市岩田地区

ますます駄目になっちゃうね。大きなハウスメーカー主流のそういう屋根になってくると。

昔の物の方が面白味があると。屋根にね。屋根の飾りにいろんな人形飾ったりとか。そういうことの意識が、もう、今の設計士さんには無いじゃないですか。何かそういうのをダサイと。逆にね、もっと其処をスッキリ、スッキリやる。「スッキリ」っちゃ、カッコいいけど、「何も無い」って事になるね。「単なる無能だ」って言っとるんだよね。そのスッキリっていうことは。デザインよう描かないから。自分で、じゃ其処に、鐘馗さんでも、絵心があって、スッキリしたところに描けば、描くだろうけど、描けないから。それを「Simple is the best」って言っとるんだよね。言い訳ですよ、本当は。

「Simple is the best」っていう意味じゃなくて、単なる単純化。だから、たとえば平板の平たい屋根にしてもね、東南アジアにしろ、棟のところに牛とか飾るじゃないですか。いろんなデザインのものね。それを愛になんかヨーロッパ見て来たから、ヨーロッパの簡単なやつだけ見て来て、それを日本にこう、導入しようとするのが、それがセンスのいい設計士さんだというような間違いが、完全に1990年代に、完全にそういう形になっちゃった。それを愛えてかにやいかん。

だから今のままだと、だんだん、そういう風に。せつかく、屋根って見えるじゃないですか、外から。外から見えるものが簡単な、洗練も何にも無い。物凄く寂しいよね。ごちゃごちゃで良いじゃないかって。ここにこういうものがあって、ここにこうと。それを全部今、取っ払っちゃって、みんな在り来りな屋根になっと思って勿体無いですね。

ハウスメーカーによる屋根瓦の平板化は、同時に経済性追求型の結果でもある。和瓦を使い、棟に鬼瓦を置くとコストが高くなるのは事実である。何が犠牲になるかといえば、広い意味での日本文化であり、狭い意味での各地の地域性や伝統である。土地の景観を担う地方色豊かな媒体である和瓦の屋根の退潮は生産の現場へ直に影響を及ぼし、さらに技術の伝承の根幹が揺さぶられることになる。信彦はそれを次のように表現している。

「Simple is the best」じゃなくて、「簡略化」みたいな。悪いのは、もっと言うと、技術の伝承もできないし、まして単価、値段の競争になっちゃうし。まあ、悪い方向ですね。

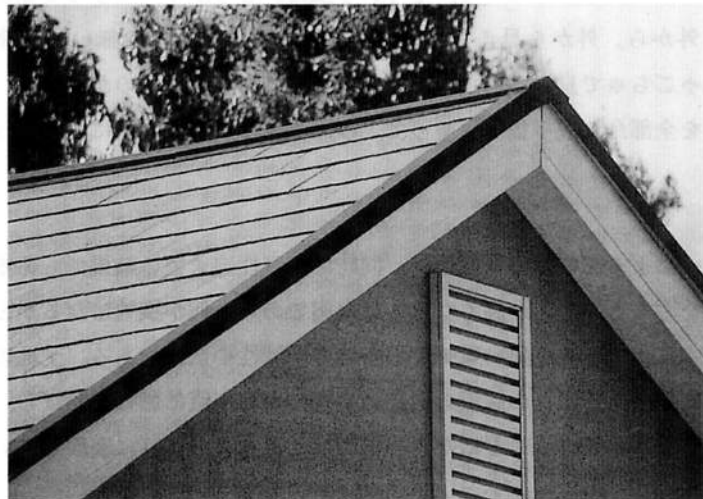
僅かな数のハウスメーカー主導で、日本文化の変貌が全国規模で起こっていると言ってよい。その変貌は消費者のみならず、生産者の側にも多大な影響を及ぼしているのが実情である。

丸栄さんの、社長さんがよく言われるんですけどね。「入っていかん園へね、瓦屋さんが入ってしまった」と。

カラーベストとかね、そういうとこの屋根は屋根でいいんです。それは安いから。それに競合しようと、入っちゃったから、どんどん、その、値段が安くなっちゃって。棲み分けが在るんだがなあ。その、カラーベスト、カラーベストの20パーセントはそりゃカラーベストでやって、その中間のそのちょっと高い部分を瓦ね。その上、天然石か、そういうこととかっていうものの、上手く、こう棲み分けができとったやつを……。(第7図参照)

瓦が下まで、こう、あの、カラーベストを食って何とかという話になっちゃうと、いわゆる、その値段になってっちゃう。上に行くなら良いけどね。

ほいで、まあ、「禁断の果実を食べてしまった」ということをよく表現されるもので。



第7図
カラーベストの屋根
(棟端に鬼瓦は無く、メタルで覆われている)
愛知県豊橋市岩田地区

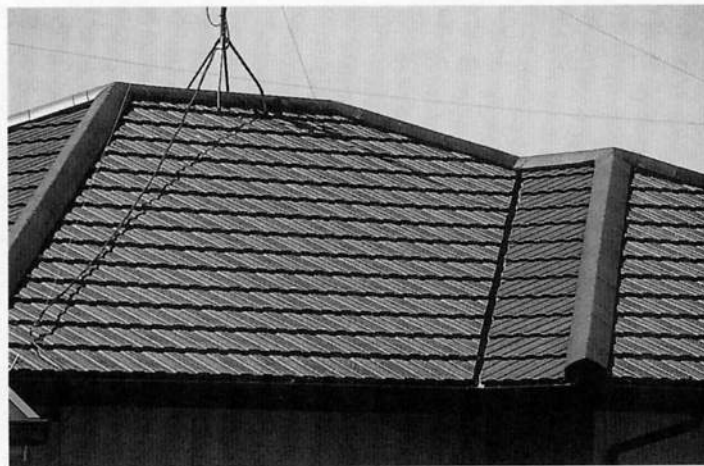
コスト競争に入ると、大量生産は避けられない。市場は地方から全国へと押し広げられることになる。その過程で価値のある、地域性豊かな文化が競争に晒され犠牲になっていく。それが今、日本の各地の屋根に起こっている現象なのである。

平板瓦でできた屋根の棟には鬼瓦は載っていない。簡単な平板瓦用の特殊瓦が棟に置かれているだけである。⁹⁾つまり、鬼瓦が無い家が日本の社会に増えて来ていると言ってよい。(第8図及び第9図参照)

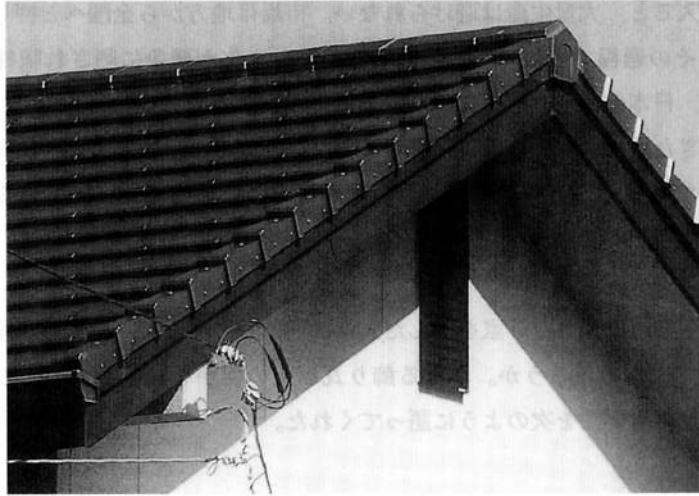
ハウスメーカー製の鬼瓦のない家を選んだ人々は別にして、なぜ、日本の家屋には伝統的に鬼瓦を載せて来たのだろうか。単なる飾り瓦以上の何かを意味しているのは確かである。信彦は鬼瓦の重要性を次のように語ってくれた。

鬼っていうのは一番のあれだよ、大事なポイントでしょう。なおかつ、厄除けとか、そういう物の意味合いが物凄く強いから。だから、まあ、(施主は)ほとんど(山本鬼瓦へ)見えて。字を、柔らかいうちに、(鬼瓦に)字を書きに。そうすると、その、載せられた檀家の人にしても、和尚さんにしても、こう感動が違うよね。

材料が入ったから、知らんどうちに載ったってということよりも、実際作ったところを見て、自分が字を書いて、(鬼瓦が)載る。だから拌みに見えるよ。こちらに見えて、装束抱えて来られて、装束に替えられてね。拌んでね、「魂入れ



第8図
平板瓦の屋根
(タイプ1：屋根の棟が全てメタルで覆われ鬼瓦は一切使われていない)
愛知県豊橋市岩田地区



第9図
 平板瓦の屋根
 (タイプ2：屋根の棟が平板瓦用特殊瓦で葺かれた鬼瓦の無い棟端)
 愛知県豊橋市岩田地区

らっせるから」って、そう言う事やって。それ位、こう、神聖な物だし。鬼（鬼瓦）はちょっと瓦とは全然違う。そういう意味では。

だからそれで、その寺の檀家さんがその事によって、こう、あれじゃないですか、幸福貰えるという。鬼（鬼瓦）には宗教って、ちゅうのはなんだ知らんけども、そういうようなものの、まあ、鬼とか、災難を捕るとか、死を守るとか、そういうものが物凄く強い。

信彦はこの後、実に面白いコメントをしている。日本の家屋は「鬼瓦の有る家」と「鬼瓦の無い家」とに大きく二分されつつあるのが現状である。もし、鬼瓦の効能が信彦の言うような意味なら、以下の信彦の言葉は妙に真実味を帯びてくる。

うちに来るハウスメーカーの人に言うんだけど、「屋根から鬼が無くなるとその内(家)、不幸になりますよ」って。

一回、あれだから、統計取ろうかと。上手に取れば幾らでも。その、平板の屋根にやっとなったところが、あの、こういうのね、5年間に、誰が死んだとか。

実際そうだって。そういう意味で家相とか言う訳でしょう。家相の良し悪しとか、そういう事っていうのはね。今、あの、使い勝手とか何か、そういう事を主流にしちゃうけどね。実際にそれ有るもんね。家というものに。

鬼瓦が載らんと、これからは、不幸が訪れるんじゃないかと……。 (笑い)

日本は現在それほどまでに欧米の合理主義・唯物主義的な思考様式に染まって来ているといえよう。それ故に西洋風なハウスメーカー主導による「モダン」な感じのする家が増えて来たのである。「モダン」とは対極にある、日本的な生ある世界に対する人々の畏敬や恐れ、人を超越する何かへの畏怖心などが薄れて来ており、それが日本を象徴する屋根の変容として現れ、鬼がその姿を日本社会から消しつつあるのである。

注

- 1) 石川類似は山本鬼瓦に居た職人の中で特に名前の良くあがる人である。最初にその名前を耳にしたのは福井製陶の福井謙一をインタビューした時であった。福井は山本福光の鬼板屋に居た頃、他の小僧とともに石川類似から鬼板を習ったと言った。山本福光も、佐市の山本鬼瓦で戦前石川類似から影響を受けている。職人として特異な人物と言えよう。福光によると石川類似は佐市の山本鬼瓦へ入る前は天野太郎の鬼板屋で職人をしており、それから信州へばんくもの晩苦者として旅職人をして歩いた人だという。
- 2) この当時、丸市は鬼瓦屋で盛んに鬼瓦を作っていたが、現在は家紋を専門に作っており、鬼瓦はやっていない。
- 3) 屋根の棟端や下り棟の先端に位置し、鬼瓦の上に突き出して置かれる長く反った円筒状の瓦を指し、実際、小鳥がよく止まって休んでいるところから「鳥休み」とも言う。
- 4) 「てり勾配」とも言う。例えば経の巻のような円筒形の瓦を横から見た時の反った曲線美を意味する。
- 5) 平板瓦の屋根は気をつけて見ると意外に多様性に富んでいる事がわかる。何故なら平板瓦は種類が和瓦と比べると多いからである。その多様な平板瓦の屋根に共通しているのが、屋根の面と面が接する棟のどこにも和瓦の場合のような鬼瓦や飾り瓦が載っていない事である。つまり平板瓦の種類の違いによってハウスメーカーごとに特徴を出していると言えよう。ただ平板瓦の屋根それ自体は鬼瓦や飾り瓦が無いので逆に単調になる。しかし棟の部分は風雨から屋根を保護するための覆いが必要である。その平板瓦屋根の棟は大きく二種類の被いでカバーされている。一つがカラーベストの屋根の流れを汲むメタル系の被いである (第8図)。もう一つは平板瓦用の特殊瓦である (第9図)。

参考文献

- 石川篤哉 1999年『信じて耐えて待つ』自家出版。
 石田高子 1983年『葺のうた』愛知県陶器瓦工業組合。
 駒井綱之助 1963年『粘土瓦読本』彰国社。
 佐藤郁哉 1992年『フィールドワーク 書を持って街へ出よう』新曜社。
 —— 2002年『フィールドワークの技法 問いを育てる、仮説をきたえる』新曜社。

- 三州鬼瓦製造組合・三州鬼瓦白地製造組合 2000年『三州鬼瓦総合カタログ2000年度版』三州鬼瓦製造組合・三州鬼瓦白地製造組合.
- 吹田市立博物館 1997年『達磨窯』吹田市立博物館.
- 杉浦茂春編 1982年『高浜市誌資料(六)』高浜市.
- 高浜市伝統文化伝承推進事業実行委員会編 2003年『鬼瓦をつくる～愛知県高浜市の三州瓦～』高浜市
伝統文化伝承推進委員事業実行委員会.
- 高原隆 2002年 「鬼師の世界—三州鬼瓦の伝統と変遷」『文明21』第9号:227-247.
- 2003年 a 「鬼師の世界—黒地:山本吉兵衛系(1)—」『文明21』第10号:163-189.
- 2003年 b 「鬼師の世界—黒地:山本吉兵衛系(2)—」『文明21』第11号:81-132.
- 2004年 a 「鬼師の世界—黒地:神谷春義・岩月仙太郎系(1)—」『文明21』第12号:113-165.
- 2004年 b 「鬼師の世界—黒地:神谷春義・岩月仙太郎系(2)—」『文明21』第13号:155-175.
- 2005年 「鬼師の世界—黒地:神谷春義・岩月仙太郎系(3)—」『文明21』第14号:97-111.
- やまだようこ編 2000年『人生を物語る—生成のライフストーリー』ミネルヴァ書房.
- 山下晋司, 船曳健夫編 1998年『文化人類学キーワード』有斐閣.
- ONIX 1992年『鬼瓦総合カタログ』ONIX.